

趣味の住宅

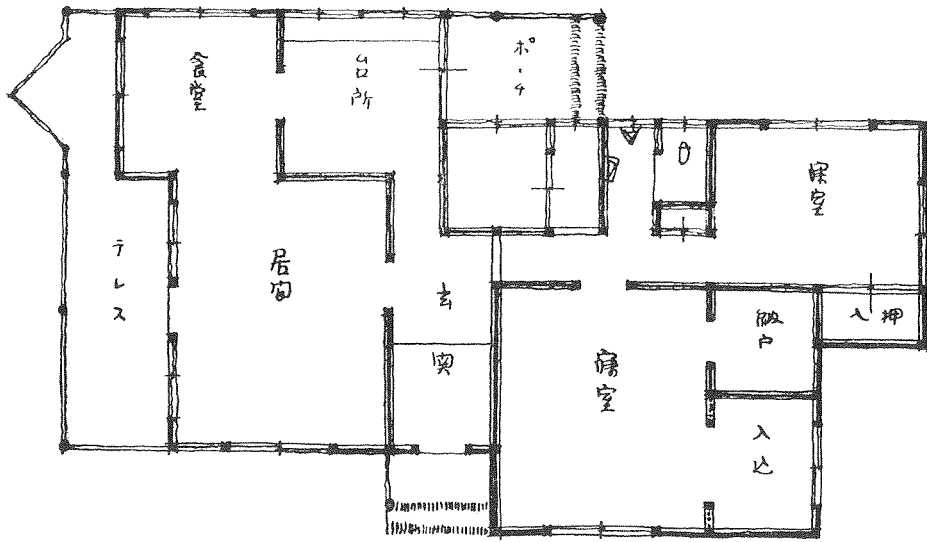
能瀬久一郎

曾つてある人が、今の建築は藝術ではないと言つたことがあつたさうだ、之に對して建築家である所の某工學士が、陰で聞いて頗る憤慨し、建築が藝術ではないと言ふのは建築を知らない人の言だてな意味のこゝを駁したさうである。建築は藝術ではないと言つた言葉にも弊があるが、今の多くの建築の中に、建築家の人々には氣の毒ながら餘り藝術的良心があるとは言へない、藝術と言ふ言葉の持つ興味に阿り過ぎてゐるやうだ、恰度金のない人が金を持つてゐる風にみせる滑稽さをみるやうに、藝術のない人が、よく藝術を口にす、さうした人等の作る所謂現今の文化住宅は、外觀を洋式にすればそれが文化だと思つてゐる、それで改良だと言つてゐる。

そこで、ふるい以前からの日本の住宅の美しさ

と純朴さをまごまごでも保つてゐるのはお百姓さんの家である、地方々々の自然に合致した、ローカルカラーのうつくしさを現すものはこのお百姓さんの家である。

行々子が鳴くむさしの原に、旅の衣はすゝかけのみちのくに、又は名におふ歌枕、白帆が泄る、瀬戸の海邊に、その所々の大自然にピッタリ合つて、得も言はれぬ親しみをおほえるのはこのお百姓さんの家である、そのプランや設備には改めねばならぬ所はあるがその外觀は今後の日本の住宅として學ばねばならないものがあるだらう、殊に田園の住宅には徒らに外國の様式を眞似ないで、日本從來のあのうつくしい様式の住宅をおすゝめたい——と言ふ様な氣持でこの案は、作られたのである。



敷地を南に面した小高い丘の上を假定しませう。

自然石で以つてこしらへた階段があります、その階段を上り詰めるご突きあたりが玄関になります、玄関を立つて左手が十帖大の居間、その奥が食堂と臺所になります、食堂は四帖半大です、居間、食堂の外側は、テレスがあります、床は板張りで、手摺は自然木、矢張り自然木で藤棚を造ります。

臺所はすべて黄白色ペンキ塗、水は<sup>やまみず</sup>を笕で引きます、臺所からポーチへ通じます、ポーチには自然木で出来た腰掛なごを置くのも宜いで

せう。

後へ戻つて、玄関を直角に曲るご、右側が寢室で十帖大、それに三帖大の入込と納戸が付いてゐます。左側は浴室と厠、突きあたりが寢室で六帖大です、押入があります。

内部はすべて、木摺漆喰壁、床は板張り、居間の天井は漆喰、食堂の天井は網代張りです。

外観は、従來の日本の農家を基礎としたもので、柱は見出しごして、防腐材塗り、そして一部は下見張りにします。壁は皆、<sup>すさ</sup>を入れた泥壁で、屋根は藁葺きです。